

リチャード・ライトの『アメリカの息子』について

鈴木 敦 巳

はじめに

「アメリカ文学」に対比して「黒人文学」と言う分け方がなされていることは事実だが、よく考えてみると、これは実に奇妙なことである。なぜなら、「黒人文学」も「アメリカ文学」そのものに他ならないし、「白人文学」と言う言葉そのものが存在しないからである。しかし、ここではその事にはこだわらず単純に「黒人文学」と言うことにする。「アメリカ文学」の中で黒人の作家によって書かれたものと言うぐらいに考えることとする。その「黒人文学」の代表的な作品の一つであるリチャード・ライトの『アメリカの息子』について述べてみたい。

(I)

Richard・Wright (1908—1960) は、ミシシッピ州のナチュズに生れた。父はある農場の綿作小作人として働いていたが、ライトが幼少の頃には、黒人の家庭にはしばしばあることだが、父親はすでに「蒸発」していた。母親が病に倒れるということもあって、彼と二才年下の弟は貧乏のどん底生活を強いられた。彼は生活を支えるために様々な仕事をしなければならなかった。母親の親類を転々としたため、同じ小学校へ一年以上いることはなかった。しかし、同級生よりも遅く入学したためか、成績は非常に良かったようである。

1927年、19才のライトは南部を脱出してシカゴに出るが、それまでの日々を描いた作品が、『ブラック・ボーイ (ある幼年期の記録)』(1945) という自伝小説である。シカゴにでたライトは、その地においても、程度の差はあるにしても黒人に対する差別があることを知った。シカゴでは母親や弟を養うために郵便局で仕分けの仕事をしていた。しかし、1929年の大恐慌で失業したため道路清掃やその他の仕事を転々としなければならなかった。

その後1932年に左翼系文学団体「ジョン・リード・クラブ」に加わり、人種差別の撤廃を主張する詩や散文等を雑誌に発表した。ライトはこの「クラブ」の執行委員になり、1932年には共産党に入党する。主に文筆活動の面から熱心に党活動に専念した。

1938年には、雑誌「ストーリー」の作品コンテストに入賞し、賞金500ドルを得た。又、有名な出版社ハーパー社 (Harper and Row) から『アンクル・トムの子供たち』を出版し、これ

によってライトは経済的にも余裕ができ、1939年には白人舞踊家ローズ・ダイマ・ミードマン (Rose Dhima Meadman) と結婚した。

1940年には、同出版社から彼の代表的長編小説『アメリカの息子』を出版し、発売後一ヶ月には25万部以上も売れるベストセラーとなった。

1941年にはダイマと離婚して、エラーポプラー (Ella Poplar) と再婚した。

1944年には共産党を離脱。1945年に前述の『ブラック・ボーイ』を出版。この頃思想的に大きく変っていく時期であった。つまり自分の生れ育った南部 (ミシシッピ州) からシカゴへ脱出し、そこで共産党に入り、脱党、アメリカからも脱出する時期である。

1946年には、ライトは家族とともにパリへ行き、翌年アメリカへもどるが、再びパリに住む決心をする。パリに住みはじめた1947年から1952年まで、ライトはほとんど執筆活動をしなかった。しかし、スタイン女史やサルトルやボーヴアワールと親しくできその影響を受けた。1953年には、フランス実存主義の影響を強く受けた『アウトサイダー』を発表した。発表当時、アメリカではあまり好評ではなかったが、ヨーロッパにおいては高く評価された。その直後、ライトはアフリカを旅するが、同じ黒い肌を持つ同族のはずのアフリカ人に対して親近感を持つことができなかった。又、スペインにも二度訪れ、その経験をもとにしたエッセー集も出版されている。これらの旅行中に無理をしたことや伝染病にかかったことなどが原因で、1960年パリの病院で一人さびしく死んで行くのであった。52才であった。

(II)

この作品は第一部「恐怖」(Fear) 第二部「逃走」(Flight) 第三部「運命」(Fate) の三部から成り立っている。

第一部「恐怖」は、主人公ビッガー・トーマスが黒人貧民街のアパートの一室に母と弟妹と住んでいる。ある土曜日の朝、大きなねずみをフライパンでたたき殺す場面から始まる。ビッガーの運命を暗示するかのごとく象徴的なものである。ビッガーは金持ちの白人ドールトン氏のおかかえ運転手として彼の家に住みこむことになった。この家にはドールトン氏と失明した夫人と大学生の娘と女中がいる。ビッガーの最初の仕事は娘のメアリーを大学へ送ることだった。しかし大学へ行くのではなく、彼女の恋人である共産主義者のジャンに会うためだった。ビッガーは無理やり黒人街のレストランへ案内させられる。メアリーもジャンもひどく酔っていた。二人を送りとどけるためビッガーは車を運転し途中ジャンを降ろす。だが、メアリーは自宅へ着いても歩ける状態ではなく、抱きかかえてやっと彼女をベッドに下ろした。ところが、そこへメアリーの盲目の母親が入って来た。ビッガーは恐怖のためすばやく彼女の顔に枕を押しつけるが、母親が部屋を出て行ったその後でよく見るとメアリーは死んでしまっていた。ビッガーは地下室のボイラー炉に死体をほうりこみ、彼女が失踪したように見せかけようとした。疑いをかけられた

ビッグーは彼女の愛人ベッシーを利用して、ジャンを犯人に仕立てるために脅迫状をださせようとしたりするが、うまくいかなかった。

捜査が進むうちに、炉のなかから灰にまじって骨やメアリーのイヤリングが発見された。ビッグーはベッシーをつれて逃げますが、足手まといになるし、メアリーを殺したことについてしつこく聴くのでベッシーも殺してしまった。そしてベッシーを通風孔に投げ込んだ。ビッグーはかくれていたビルの屋上に追いつめられついに逮捕された。

留置所に入れられたビッグーを、ジャンが彼の友人の弁護士マックスをビッグーにつけてくれる。これら三人の対話や裁判における検事と弁護士マックスの戦いなどがあるが、最終的には、ビッグーは電子椅子に送られるのである。

(III)

アメリカ社会において、黒人はその皮膚の色が黒いという理由だけであれほどにも長い間、又、現在においても差別され苦しんできた民族は他にないのである。それ故に、黒人のあるがままの生活を文学によって表現することは、ライトにしてみれば「抗議」することでもあり「抗議文学」とも言われる所以である。前述したように『アメリカの息子』の冒頭は、ねずみがたたき殺される場面が始まるが、このねずみはビッグーそのもののようである。せまいアパートの一室でなんとか殺されずにすめば良いと思わなければならない生活である。だが、いずれはのたれ死ぬかたたき殺されるかである。ビッグーは仲間と白人の店に押し入ることを計画したり、つまらない映画を最後までみたり仲間と大喧嘩をしたりする。一つ一つの行動が無目的であり、その場限りのものなのである。白人の運転手としてやとわれたのも、生活保護のお金をうちきられないようにするためのことである。メアリーを殺してしまうのも、よっぽだった彼女を寝室にはこびこんだところを盲目に母親に知られたらどんな風に思われどうなるか。その恐怖心は幼い頃からビッグーは知っているのである。これも無意味な、しかし恐怖心からくる犯意なき殺人であった。このような行為もやるせない気持をどうすることもできないことをビッグーは知っているからである。

メアリーを殺害することによって、ビッグーは今までに経験したことの無い気持になる。つまり、自分が何であったのかわからなかったのが、殺人という行為によって解放感と自我の目ざめのようなものを感じるのである。だが、この解放感も炉のなかから骨などが発見されることによってビッグーの犯行であることがわかり、逃走しなければならなくなるのである。

逃走の過程においてビッグーは自分を守るため恋人ベッシーも殺さなければならないと考え、眠っている彼女を殺してしまうのである。これも犯意なき殺人であった。これら二度の殺人と逃走に今までに味わったことの無い解放感を味うのであった。

第三部の「運命」において、ビッグーをここまでやったのはアメリカの社会構造であるとライ

トは描こうとしている。ビッカーの犯罪についてそれぞれ異った立場から、新聞や警察や政治家は自己宣伝のために利用し、コミュニストはアメリカ社会の構造を批判し、資本家は博愛主義を口にするが、所詮黒人の搾取者である。立場の異なる人々の「論争」もビッカーの心をゆり動かすことはできない。ビッカーは完全なアウトサイダーなのである。ビッカーは死を選ばざるを得ないことを認識し死に立ちむかうのである。ビッカーは、次の言葉を残して死に臨むのである。

「わたしは殺したくはなかったのです！」とビッカーは大声を上げた。「わたしがひとを殺したりした理由はこのわたしなんです！わたしの奥深いところに、ひとを殺させるようなものが、ひそんでいたに違いないんです！殺したりしたのは、それを猛烈に強く感じたからに違いないです」……………

「わたしのひとを殺した理由は、正当だったに違いないんです！」ビッカーの声は気も狂いそうなほど苦悩に満ちていた。

「正当だったに違いないんです！人間が人間を殺す時には、何かがあるんです……………わたしはそのために殺さねばならないほど、せっぱつまった気持になった時まで、自分がほんとうにこの世の中に生きていくような気がしなかったのです……………」(『アメリカの息子』)

ライトのこの作品は、アメリカの黒人に対する人種的差別の「抗議」の文学と言える。だが、その「抗議」も消極的である。なぜならば、常に恐怖感と劣等感がつきまとっているからである。しかし、この作品が単なる「抗議」ではなく、ライトの人間としての苦悩や、アメリカ黒人の心の奥深い部分を凝視しようとしている点で高く評価できるであろう。

参 考 文 献

- 1) Native Son. Richard Wright. Penguin 1972.
- 2) Black Boy. Richard Wright. Signet 1963.
- 3) The Outsider. Richard Wright. Harper & Row 1963.
- 4) アメリカ文学史, 大橋健三郎, 齊藤光, 明治書院 1975
- 5) 黒人文学入門, 古川博己, 創元社 1973
- 6) アメリカ黒人の文学, 大内義一, 鈴木三喜男, 西尾巖, 早大出版部 1978
- 7) アメリカの息子たち, E, マーゴリーズ, 大井浩二訳, 研究社 1971
- 8) リチャード・ライトの世界, 大内義一, 鈴木三喜男, 評論社 1981
- 9) 黒人文学研究, 橋本福夫, 早川書房 1970
- 10) 黒人文学の世界, 橋本福夫, 未来社 1975
- 11) アメリカの息子 (I) (II) 橋本福夫訳, 早川書房, 1970~1971
- 12) ブラック・ボーイ (I) (II) 野崎孝訳, 岩波書店 1962
- 13) アウトサイダー (I) (II) 橋本福夫訳, 新潮社 1972